

科研費・基盤研究 A

「天体景観への認知と祭祀および暦の生成に関わる考古天文学の展開」 (23H00021) 「アイヌ民族の宇宙観研究のためのデータベースの構築①」および 「ろうそくもらい行事を対象とした天文民俗の文化伝搬に関する調査」の成果報告 書

古屋 昌美

はじめに・北海道で生まれた星の文化

日本国内において古来より使われてきた星の伝承や文化は、現在一般的となっている西洋星座とは一線を画し、地域の文化や生活に根ざしたものが多い。大きく分類すれば、本州を中心とし地域の暮らしの中で培われてきた「星の和名」、北方の北海道を中心としたアイヌ民族による「アイヌの星」、南方の琉球王朝や八重山諸島を中心とする「沖縄の星」となり、いわば三つの星の文化が存在していることとなる。社会の多様性が重要視される中でも、それぞれの知名度は高いとは言いがたく、各分野を調査研究する者も多くはない。文字に残すことなく人から人へと伝えられた伝承も多く、その記憶を持つ者がいなくなれば永久に失われてしまう危険性を常にはらんでいる。今回はアイヌ民族の星の文化と宇宙観の理解と解釈のために、先行事例もまじえて収集・検証してゆくことを目的とし、なかでもアイヌ語の中で幾種類にもなる星を表現する語彙の地域分布を考察するための事例を集めるための資料収集をおこなった。また2023年1月から2024年1月にわたって同時におこなってきた北海道各地域に今も残る独自の風習である「七夕ろうそくもらい」に関連する資料調査と、なかでも8月7日に札幌市中央区でおこなわれた「七夕ろうそくもらい」の風習調査を中心に、それぞれの状況の調査報告とともに今後の活動計画と考察につなげていきたい。

アイヌの星と末岡外美夫氏

現在、北海道で培われたアイヌの星の文化と伝承の歴史について語るとき、外すことができない人物が末岡外美夫氏(1931-2002)である。旭川出身の氏は太平洋戦争から復員後、小中高の教員生活や海外での大学講師をといった経歴を持つ。旭川市科学館には1954年旭川市天文台の回報『THE SKY 7号』に末岡氏がアイヌ語での惑星名を紹介した記事「惑星の旧愛乃名」がある。氏がアイヌ民族の星の伝承と文化を調査するきっかけとなったのが元旭川市立天文台長の堂本義雄氏が1950(昭和25)年の夏、旭川市にて開催された北海道開発大博覧会で特設館として設置されたアイヌ民族資料館を数名で訪問した際、アイヌ人の資料を前に「アイヌ民族の見た星のことを調査できれば、興味深いものがあるはずだが」という話が出たのがきっかけと著書の中で振り返っている。(末岡外美夫『アイヌの星』旭川叢書第12巻、旭川振興公社1979年より引用) 当時すでにアイヌ民族の中でも失われつつあった星の伝承やその事例を聞き取り、記録したものを精査の上、著書にしるした。1979年に出版された『アイヌの星』、そして氏の没後2009年に遺稿をまと

めて夫人の末岡由喜江氏によって出版された『人間たち(アイヌタリ)の見た星座と伝承』の二書はアイヌ民族の星の文化を語るときに必ず引用・差参照される唯一無二のバイブル的な存在と断言していいだろう。その調査記録は星の和名・収集で知られる野尻抱影氏にも送られ、野尻氏の著書の中でアイヌ民族の星の文化として紹介されている。野尻氏によってスポットがあてられた星の和名と同じく、一般大衆にひろくアイヌの星の文化が紹介された事例と言える。末岡氏の著書に集録された星の名と伝承は膨大な調査記録の中でチェックを入念におこなった上で信用性のある確かなものを掲載しており、掲載できなかった事例や伝承が多く残されていることも想像に難くない。また、今野氏が調査収集をおこなっている北海道教育委員会によるアイヌ民族の民俗文化調査報告書シリーズは1968年から現在も刊行が続く膨大な資料であり、1975年の報告書は末岡氏も参考文献としているがその大半は末岡氏の著書発刊のあとの「アフター」であり現時点で総数は184冊に及ぶ。その中からの星に関する表記は今年度中に調査を終える予定だが、抜き出された事例と末岡氏の著書との比較、それ以外の書籍との照らし合わせは次年度以降の課題となるだろう。主な調査内容は末岡氏の業績と今回の科研報告では同じく天文民俗分野において共同作業をおこなっている今野氏の報告をご覧いただくとして、ここでは試みの一つとして末岡氏の著書が出版される前の時点では、アイヌの星の名前や天体を意味する名称がどれだけ採集されていたのか、明治期から昭和初期にかけて出版されたアイヌ語辞典を中心に抜き出し、末岡氏の著書内に記録された星名と照らし合わせる作業をおこなった。辞典のための現地調査では、言語の採集者が天文知識を持ち合わせていないこと、そして話者の地域や性別などによっても星や天体にまつわる知識の有無があるため、星に関する名称でもそれが実際にどの星を指す言葉か同定できないまま挙げられているものや、アイヌ語で「星」を指す言葉だけでも地域によって多岐にわたる事例が見受けられるためである。

今年度は『北海道あいぬ方言語彙集成 東北海道編(吉田巖・小学館)』『アイヌ語方言辞典(服部四郎・岩波書店)』の抜き出しが完了しているがこの2点だけでも末岡氏の著書に記述のない星名や、その星を指すか検証のできない星座名を見つけることが出来た。アイヌ語の方言は現時点でも多岐にわたり、道内だけでなく樺太・千島もあわせて10の方言が記述されている。また、昭和の終わりから平成にかけては地域のアイヌ語を学習するサークルによってその地域のアイヌ語をまとめた辞書テキストも出ているが、自家出版的なものであるため道外で閲覧することができないものがほとんどであり国会図書館にも収蔵されていない。そのため2024年1月には北海道札幌市の中央図書館と学外者も閲覧可能な札幌大学の図書館にて後述の書籍資料を閲覧し、任意の語彙についての取扱いがあるか確認をおこなった。末岡氏の著書を中心にその参考文献とされる215点の資料、それ以外の資料や氏の没後にまとめられた資料をまとめ、アイヌの星に関するデータベースを構築、一覧化するとともに星名や伝承の地域的な特性や伝播の流れを目視化し事例のマッピングを可することで、今後、アイヌの星を研究の対象とする人への一助となることを来年度以降の活動目標としたい。

<今年度おこなったアイヌの星の文化および和名に関連する調査>

●1月22-23日

星置神社

(北海道札幌市手稲区星置南1丁目8番地1)

月寒神社

(北海道札幌市豊平区月寒西3条4丁目1-56)

小樽住吉神社

(北海道小樽市住ノ江2丁目5番1号)

札幌・小樽での星・月の名を持つ神社を訪問。



星置・月寒に関してはアイヌ語の地名が元となっており天体としての由来はないことを確認。オリオン座の三ツ星の神格化という説を持つ住吉三神を祀る住吉神社の拝殿の方角を確認。神社は高台に位置し参道からは入口の大鳥居の向こうに小樽湾が望める。拝殿から参道の延長線上、やや東方向にオリオン座の三ツ星が昇ってくることになる。社務所にて期間限定の御朱印ともに住吉大神とオリオン座についての説明書が配布されており、観察しやすい時間帯が挙げられていた。(画像参照)星にまつわる御朱印は星置、月寒の二社でも授与されていたが数量・授与期間限定で大変反響が大きく月寒は訪問の時点ですでに終了、住吉も一旦終了していたものが偶然、訪問当日から授与開始とのことで入手することができた。

●3月22日 北海道立北方民族博物館(北海道網走市字潮見 309-1)

北海道から樺太のアイヌ民族、ウイльтаやオロッコといった北方民族にまつわる資料を見学、学芸員の氏より資料に関する情報を提供いただき、館内の資料を閲覧。

●6月5日 川村カ子トアイヌ記念館(北海道旭川市北門町 11 丁目)

2022年に訪問した記念館が老朽化に伴い新館を新設、7月にリニューアルオープンするとのことでプレオープン期間であった6月に訪問。旧施設は道内最古の私設アイヌ資料館として民族の存・展示していることもあり雑多な印象も否めなかった。6月の時点では一部未完成の展示ブースもあったがアイヌ民族の日常生活や文化に関する展示、2階には旧館にはなかった現在のアイヌ民族の状況を伝えるメディア資料や、近文コタンが発祥ともいわれる木彫りの熊に関する展示も見られた。1階にはアイヌ民族に関する資料・書籍を所蔵する図書コーナーもあり閲覧が可能。フロアの天井には北極星の周囲を踊りながら回る北斗七星(ウポポケタ)をモチーフにした意匠があしらわれていた。施設名となっている川村カ子ト氏は、末岡氏がアイヌの星の聞き取り調査をおこなった古老のひとりである。この日館長は不在でいらしたが



後日、来訪する際には事前連絡をとのお返事をいただいたので新年度再訪を計画したい。

北邦野草園(北海道上川郡鷹栖町嵐山)・ノチウ岩

現在の旭川市緑川町近郊は明治期にアイヌ保護のモデル地区として設置されたアイヌの集落、「近文コタン」のあった場所である。明治政府の政策によってできたこの集落は『アイヌ神謡集』の著者である知里幸恵氏の出身地としても有名である。その近くには上川アイヌの聖地とされる嵐山があり、かつて上川アイヌが「チ・ノミ・シリ(われら・いのる・山)」と崇めた神々と人間を繋ぐ聖地とされてきた。現在は「アイヌ文化の森・伝承のコタン(集落)」として、アイヌの住居や祭壇を復元展示しており旭川市博物館の分園である嵐山公園センターの管轄となっている。センター内にはアイヌ民族に関する展示、北方系の森林植物を保護する北邦野草園としての資料展示を見学することができる。復元されたチセは上川アイヌの特徴を表しており、阿寒コタンを訪れた際に見たチセや白老のチセとは様式が違うことに気付く。内陸のコタンは川や湖の近く、若干高台につくられていたというが、その土地の地形と植生によって、チセの建築様式のようにその暮らしは画一ではなかったことが見て取れる(ちなみにチセを葺く作業は女性の仕事で、その材料を取ってくるのが男性の仕事と分業だった)センターのスタッフの方によると、コタンが復元されている場所は、聖地のため元々は居住地ではなかったが、今は毎春に聖地としての祭礼(チノミシリ・カムイノミ)を復元コタンの中で行っているという。センター横を流れるオサラッペ川沿いに歩くこと10分ほどで石狩川と合流する、その場所に今回の目的地であるノチウ岩があった。「あるとき空から星が落ちた。見に行くと岩が立っていたので、この岩をノチウと呼んだ」。地元のアイヌ民族に受け継がれる伝説だが、実際には日本各地にある降星伝説と同じく、通常の岩石であり組成は赤色チャートである。1億年以上前、太



平洋側のプレートが大陸側に潜り込んだことで変成した岩盤の一部で、硬いため川に浸食されずに残った。嵐山の山頂にも同種の岩があるという。ノチウの最初の記録とされる1857年の松浦武四郎の著書によると、昔は陸続きだったという。どの年代の

時点でこの伝承が生まれていたのか、道内には他にも降星伝説を持つ地域がありアイヌ民族の目線での「星が降ってきた」伝承も詳細と共にまとめていく必要を感じる。

北鎮記念館(北海道旭川市春光町国有無番地 陸上自衛隊旭川駐屯地内)

北海道の開拓と防衛を兼ねて設置された屯田兵や旧陸軍第七師団についての資料を展示している施設。オリオン座三ツ星の和名で比較的新しいもののひとつに「ジョウトウヘイボシ(上等兵星)」がある。「上等兵」とは旧陸軍における兵士の階級であり、肩章などで階級をあらわす星の数が3つであることが由来と考えられている。大阪や長崎、北海道など広く採集例があり、特に戦時中使われることが多かったという。明治期からの陸軍に関する歴史資料が多いとのことで、旭川市訪問の際に立ち寄り上等兵を表す「星3つ」の表記がいつ頃から使用されているのか資料を閲覧。軍服

に関しては変更ごとに制定の勅令が出され、上等兵の肩章を星3つとする形式が正式に確定となったのは明治38年の戦時服制定、翌39年の勅令とわかった。星の和名調査研究者の北尾氏が実際に長崎県佐世保市で昭和5年生まれの方より採集した際に「オリオン。上等兵星。星3つ、上等兵星。こどもたち、上等兵星と言っていた」との言がある。(北尾浩一『日本の星名事典』原書房129p) 明治末期に制定された「星3つ＝上等兵」の認識が、昭和5年生まれの話者の子ども時代にはすでに一般的になっていたことが裏付けられることとなった。

2024年1月 札幌市中央図書館(北海道札幌市中央区南22条西丁目1番1号)

札大付属図書館(北海道札幌市

旭川市科学館(北海道旭川市宮前1条3丁目3—22)

市内の図書館で閲覧可能なアイヌ語辞典を中心とした文献の調査。(詳細は後述)

<七夕ろうそくもらいに関連する調査>

1月22日 小樽市総合博物館(北海道小樽市手宮1-3-6)

特別展「特別展「アトウイ-海と奏でるアイヌ文化-」を見学。副館長の大鐘氏より解説をいただくとともに、小樽市内の地域でのろうそくもらいについてお話を伺う。(詳細は後述)

7月16-21日 祇園祭 前祭及び後祭でのわらべ歌調査(京都府京都市)

七夕ろうそくもらいの関連が指摘される祇園祭山鉾でのわらべ歌を聞き取り調査(詳細は後述)

8月7日 北海道開拓の村博物館(北海道札幌市厚別区厚別町小野幌50-1)

札幌市中央区南円山地区 啓明町内会

南円山まちづくりセンター(北海道札幌市中央区南9条西21丁目)

七夕ろうそくもらいの実地調査(詳細は後述)

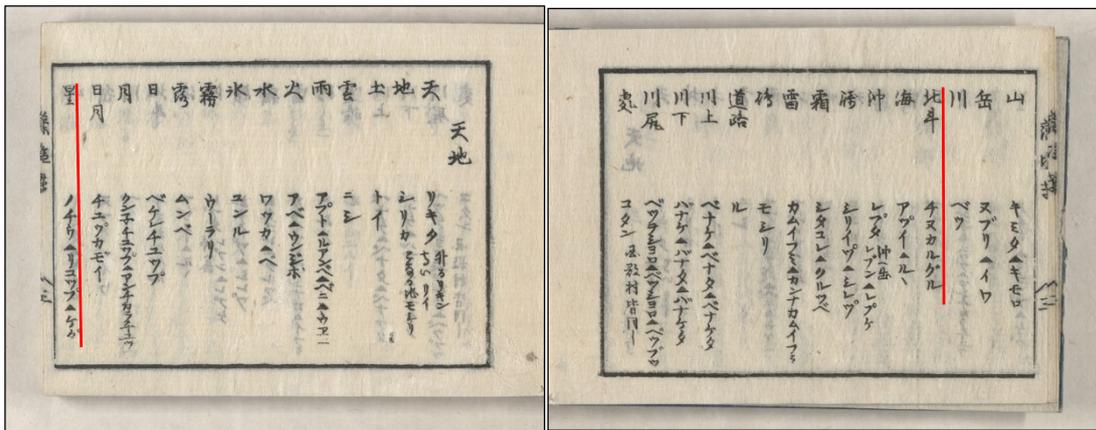
アイヌの天体観と伝承 末岡外美夫氏『アイヌの星』を中心に

アイヌ民族は日本列島北部周辺、とりわけ北海道を中心に暮らす先住民族である。日本語と系統の異なる言語である「アイヌ語」をはじめ、自然界すべての物に魂が宿るとされている「精神文化」や、祭りや家庭での行事などに踊られる「古式舞踊」、独特の「文様」による刺繍、木彫り等の工芸など、固有の文化を発展させてきた。しかしながら江戸時代には松前藩による不平等な交易、維新以降は明治政府による「北海道旧土人保護法」により本来の生活を追われ弾圧や差別を長らく受けてきた歴史を持つ民族でもある。文字を持たないため2に口頭で伝えられてきた伝承や知識はアイヌ語の使用禁止と共に多くが失われることとなった。その中には星にまつわる伝承もあったアイヌ民族の持つ世界観は垂直構造であり天の世界はカントモシリ「Kanto(天の)mosir(国土)」という。自分たちが暮らすアイヌモシリ(人間の世界)の上には何層もの雲や空や星やカムイの住む世界があり、地下にはいわゆる地獄にあたる世界や黄泉の世界があるとされ、悪事を働いた人間やカムイは生まれ変わることもできないと考えられた。(死後の世界や地獄に関しては地下でなく、

西方の果てにあると考えられている場合も多い。殺風景でじめじめした湿地の国で、ここに追放された魂は現世に転生することが叶わないといわれ、ユカラ(口承文芸)では敵役にとどめを刺すシーンでしばしば「六重の地獄に踏み落とした」などの表現がみられる。

その中で星は独立した世界にあり、アイヌ独自の星の見方によって様々な名を付けられた。それは星の動きで知ることのできる時間や方角、季節だけでなくアイヌの文化・歴史・アイヌが大切にしている生物や気候から成り立ち北海道の大地や自然、生き物との暮らしを星から読み取ることができる貴重なものであると言える。江戸時代の書物『蝦夷方言藻汐草』に星(ノチウ、リコフ、ケタ)や天の川(ペッコカ)、北斗(チヌカルグル)、牽牛(チクサグル)、織女(マラフトノカ)といった記述がある。

＜蝦夷方言藻塩草乾巻。北斗(チヌカルグル)、星(ノチウ、リコフ、ケダ)の記述がみられる



星をあらわす複数の言語

アイヌ語は北海道・樺太・千島列島を中心に使われてきた言語で、日本語とは別の言語である。「～が」+「～を」+「～する」の順に単語が並ぶなど日本語と似ている部分もあるが、文法的には異なる部分が多い。アイヌ民族は文字を持たなかったためかつては口頭でのみ使われてきたが、現在は従来のカタカナにはない文字(ド、ク、ブ、ハなど)も使いながら表記されている。明治以降、日本政府によるアイヌ語使用の禁止や文化弾圧の過程によって失われていき、2009年にはユネスコによって消滅の危機にある言語と位置づけられている。その中で、星を意味する言葉は複数あり、地域によっての方言に差異があることが分かっているが、語彙の分布に関して詳細な調査がなされたことはない。アイヌ語の方言は多岐にわたる。現存しているアイヌ語の辞典辞書以外にも地域で自家出版的につくられたものもあわせれば20を越えるが、各書が日常生活の中の膨大な言葉を網羅できているとは言い難い。日本語でいうところの「標準語」が存在せず、性別や年齢によって使われる語彙も異なること、本格的な採集調査が行われた明治末期から大正時代の時点で言語採取の協力者も高齢であったことなど偏りがあることも否めないが、『アイヌの星』の著者である末岡氏がその数十年も後となる昭和20年から40年代にかけ、アイヌの400人を越える古老を訪ねて歩き『アイヌの星』人間(アイヌタリ)たちの見た2冊の書籍をつくりあげた成果を見れば、辞典に関しては採取者が天文知識を持っていなかったこと、アイヌ独自の星の名や星にまつわる伝承を重要と認識していなかったこともあり採集に至らなかったことが大きな原因であると言えるだろう。

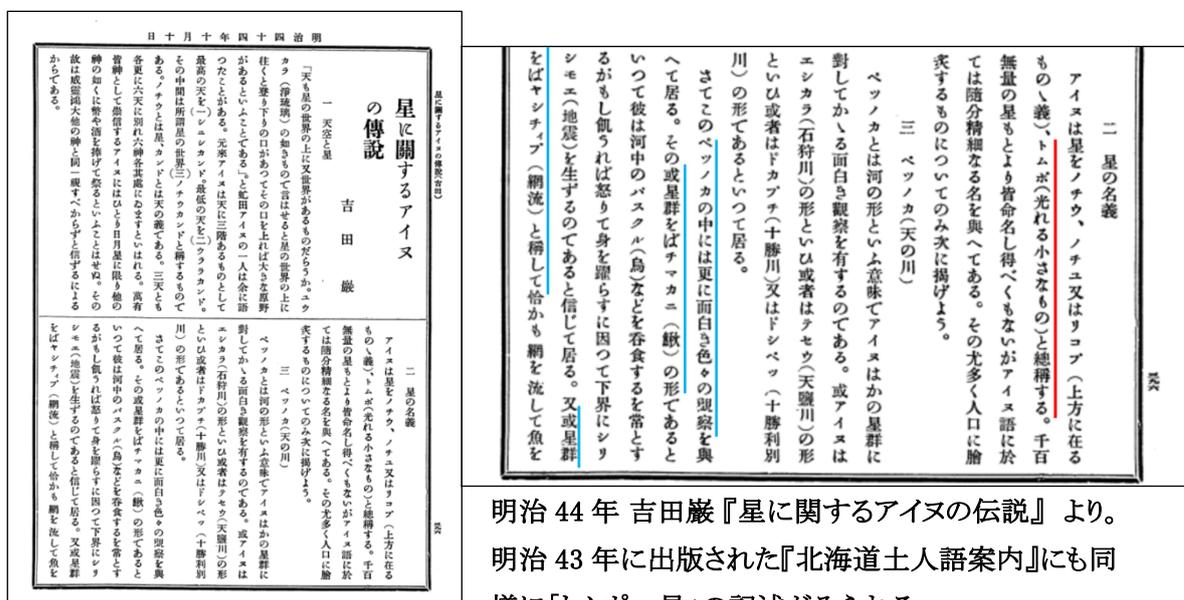
『アイヌ語方言辞典(服部四郎編・岩波書店)』には天文・自然現象の項目で69語中天文に関する16の語彙(空・太陽・日の出・日の入り・日食・月・満月・半月・三日月・新月・月食・星・北極星・北斗七星・あまのがわ・流れ星)が7か所の地域(八雲・幌別・沙流・帯広・美幌・旭川・名寄)の方言で挙げられているが「知らない」「わからない」「見たことがない」といった記載も多く充分とはいえない。アイヌ語の中で星自体を指す言語は

ノチウ(nochiw)・・・星をさすことばとして広くつたわる。

リコブ(rikop)・・・函館、松前など。「リク(上に)」+「オト(ある)」+「プ(もの)」

ケタ(ketta,keta)・・・主に宗谷などの北部～樺太

と地域による差異が見られる。初期の辞書には星を指す言葉として「トムポ(光れるちいさなもの)も見られるが、明治以降つくられた辞書の中にその名を見ることはできない。



明治44年吉田巖『星に関するアイヌの伝説』より。明治43年に出版された『北海道士人語案内』にも同様に「トムポ=星」の記述がみられる。

また、辞典の中には「星」だと記されているものの星名が同定されないままのものもある。

今回は試験的に『北海道あいぬ方言語彙集成 東北海道篇(吉田巖・小学館)』、前述の『アイヌ語方言辞典(服部四郎編・岩波書店)』の抜き出しが完了しているが、この2点だけでも末岡氏の著書に記述のない星名や検証ができない星名があることが見受けられる。アイヌ語方言辞典に関しては、道内及び樺太、千島もあわせて10か所の方言が記述されている。その他にも地域で独自に作成された辞書も調査を進めているが、語彙数自体が少なく、星名の記述に関してはないものも多い。しかしながら地域による語彙の差異や変化の検証はおそらくこれまで行われてはいないと考えられるため、今後の調査課題としては重要と思われる。別途進められている、末岡氏が著書を執筆するうえで参考にした資料215点と合わせての精査が必要である。また、得られた語彙や事例は最終的にはマッピングすることにより、語彙と文化の伝播を視覚化したい。

<確認をおこなったアイヌ語辞典資料一覧>

昭和に入ってから刊行された辞典系資料のなかでアイヌ語で星を意味するものについての記載があるか確認をおこなった。

書名・著者・出版社		星に関する記載
アイヌ語 白老方言の研究 白老 楽しくやさしいアイヌ語教室 (1)2010/2 (2)2011/2 発行		ノチウ(nociw) = 名) 星 話者: 森竹竹市(1902-1976)
アイヌ語辞典 千歳方言 中川裕 草風館 1995	千歳地方の方言約3700を表記	大部分は女性からの採取 ウエベケレやユカラに関しては強いが、祈りや儀礼に関する言語が少ないと指摘 ノチウ(nociw) = 名) 星 ノチウオカント nociwo kanto = 名) 星の天。 イワン iwan 数) 6つの。たくさん。常套句のなかで多様され「多数」を表すのに用いられる。 例) 夏の年6年、冬6年←非常に長い間ということをあらわす常套句。 (註: すばるをあらわすイワンノチウはイワン=6つという意味以外に「たくさんある星」という意味もあるのでは)
アイヌ語正典 真義への研究 藤原 聖明 新泉社 1994	知里真志 保などのアイヌ語への批判書?	天体におけるものとして「oma」の表記 rik oma chup(空に出ている太陽) rik o p(リコプ) = 星
カラフトアイヌ語 村崎恭子 図書刊行会 1976	カラフトアイチシカ方言を中心に採集	nin cuh(半月) pon chu(三日月)
ウイルト語辞典 池上二良 北海道大学図書刊行会 1997	大正-昭和20年代までの南樺太を調査	星(unigeri, xosiktab 月(bee 満月(ceeso bee 太陽(suun
アイヌ語古語辞典 平山裕人 明石書店 2013		ノチウ=星 マツネノチウ=北極星 リイコ=星(松前) リコプ=星(旭川)リコプに関しては20世紀初頭道南西部や釧路でも使うなどの記述がある。
アイヌ語十勝方言例文集1 高橋靖以 編著 北海道大学アイヌ・先住民研究センター 2014		記述なし
アイヌ語十勝方言会話小辞典 高橋靖以 編著 北海道大学アイヌ・先住民研究センター 2016		記述なし
アイヌ語浦河方言語彙集 高橋靖以 編著 北海道アイヌ・先住民研究センター 2017		星 nociw ノチウカムイ nociwkamuy 星の神 チュプ cup 太陽月 チュプペける cup peker 太陽が明るい cupkamuytasum 日食ちゅぶかむいたすむ
アイヌ語厚別方言語彙集 高橋靖以 編著 北		記述なし

海道アイヌ・先住民研究センター 2015		
アイヌ語 白老方言辞典 大須賀るえ子,佐々木敬允, 他 白老 楽しく・やさしいアイヌ語教室白老 2016		ノチウ(nociw) = 星
アイヌ語旭川方言和愛辞典草案 長田祐季他 編著 旭川アイヌ語研究会 2010		ノチウ(nociw) = 星
アイヌ語釧路方言語彙 釧路アイヌ語の会		ノチウ(nociw) = 星
アイヌ語静内方言文脈つき語彙集 奥田統己 札幌学院大学人文学部 1999		記述なし
アイヌ語様似方言辞典 小松和博 様似アイヌ語教室 2004		ノチウ(星) チュカムイ(太陽・月)
アイヌ語辞典沙流 田村 すす子 草風館 1996		ノチウ(nociw) = 名) 星
アイヌ語様似方言辞典 小松和博 様似アイヌ語教室 2004		記述なし
萱野茂のアイヌ語辞典 [増補版] 三省堂		いゆたにのちゅー iyutani-nociw 三ツ星:オリオン座中心部の連星 いゆたに=杵 のty- = 星 北斗七星といさたおつ toyta-saot といた=畑を耕す さおつ=逃げる びさつくのか pisakku noka 「畑耕しから逃げる」畑時期になるとずうっと上へ逃げるのでそうよばれる ちぬからのちゅーci=nukar=nociw 星 nochiw an ita nochiw rann ann be an nuker 夜に星が落ちるのが見えた
日本語・アイヌ語辞典 國學院短期大学コミュニティカレッジセンター		記述なし

試験的に抽出しを行った資料

『北海道あいぬ方言語彙集成 東北北海道篇』吉田巖 小学館 1989年

著者である吉田巖氏が昭和28年2月までに集積した語彙を50音順にし日高を中心とするものと釧路十勝を中心とする東北北海道のものに大別、天文・地文・人文・言語にわけ和訳・用例を付けている。集録語彙は6000余となる。それまでにアイヌ語彙集を代表するものとしては約30のコタンの方言を採集昭和13年のジョン・バチェラー編の『アイヌ・英・和辞典』があり、これがアイヌ語の基礎となっていたが語彙の採集地が明らかでなく、発音記号の表記もない。アイヌ語は発音や意味が地域で大きく異なるため採集地の記録は重要である。この書では採集地を明らかにしており方言の地域分布を明らかにする重要な記録と言える。各地域の言語の中には「天文編」として<天

体体・天象・時間・空間＞を表す語彙が掲載されており、その中で天体に関する語彙を抜き出し、他の資料(主に末岡氏の著書)に同じものがあるかチェックを試みた。

<十勝地域の天体に関する語彙・20点>

◆…末岡氏の著書及び、他の辞典に記述のないもの

十勝	あるぬまんのちう	arunumannochiu	伏	宵の明星
	いわんのちう	iwannochiu	伏	6つの星
	かやう(し)のちう	kayaushnochiu	音	彗星のひとつ
	かやうしのちう	kayaushinochiu	伏	彗星のひとつ
	かんど	kando	芽	天界
	かんどもしり	kandomoshiri	伏	神界、天上界
	くる	kuru	伏	星
	しりぺけれかむい	shiripekerekamui	音	天上の神、日神
	ちこあつのちう	chikoatnochiu	伏	宵の明星
	ちぬからくるかむい	chinukarakurukamui	伏	北斗七星
	ちぼるしくる	chiporushikuru	伏	月中の黒き部分
	ちうぶかむい	chupkamui	音	月神
	つ(ぶ)かむい	tupkamui	伏・音	日神
	つぶかむい	tupkamui	音	太陽
	つぼるうしこるかむい	tuporuushikorukamui	音	月中に見ゆる影
	にいくる	niikuru	伏	六星の別名
	にしあつさほつのちう	nishiatsahotnochiu	伏	曉明星
	のちう	nochiu	伏	星
	のつう	notuu	音	星
	ゆわんのちう	yuwannochiu	伏	六星

<採集地域の略>

伏:十勝国河西郡帯広町伏古

毛:芽室町毛根

芽:芽室町芽室太

音:河東郡音更村下音更

白:中川郡幕別町白人

(註1)人類学雑誌第27号(1911)吉田巖氏「星に関するアイヌの伝説」にカヤコロノチウ<十勝の音更等で帆を持つ星>、カヤウシノチウ<帆ある星>の記述あり。

(註2)chinukarakuru「夕づつ(金星)」renushikuru「三星のごとく星をさす」とあるが、星を指す言葉の中でkuruという表記は他の辞典や資料には見当たらない。“チヌカルクル(chi-nukar-kur)

“は蝦夷方言藻塩草(1804年)の乾巻に北斗(七星)の意味として記されており、野尻抱影氏の『日本星名辞典』(東京堂出版1973)ではジョン・バチェラー、金田一京介両氏からの資料を元に北極星を示すとある。天界242号の野尻氏の記事「アイヌ伝承の星名(上)」ではアイヌ研究科久保寺逸彦氏からの教示としてクル(kur)とは「人」を意味し kamui(表記ママ)の神に対して人を ainu とし、-kur は-mat(女性)に対し男性を意味するのが原義だが-kur を人の意味として用いる場合は敬意を含むとある(天界242号昭和16年8月号東亜天文協会254pより引用)

(註3)註2のクル＝星と同じく、星を「クル」と表現する事例。採集地はどちらも同じ十勝国河西郡帯広町伏古とあるが、同地域での採集名にはアイヌ語で星を意味する言葉として上位にあがる「ノチウ(nochiu)も見られる。

<十勝地域の天体に関する語彙・19点>

◆…末岡氏の著書及び、他の辞典に記述のないもの

釧路	あべちら(ん) げかむい◆	abe- chirangekamui	春	星の名	(註4)アペ(火・炉)の意?
	いわ(ん)のち う	iwan-nocgiu	白	六星	
	おかぢ	Okaji	春	七星	和名:あわかぢさま
	おぬま(ん)り こ(ふ)	onuman-ri- kop	春	宵の明星	
	おぬま(ん)の ちう	onuman- nochiu	白	宵の明星	syn:arunoman-nochiu(←日高沙流方言)
	おらんか(ん) かむい◆	orankankamui	春	星の名	
	かんと	kand	白	天上界	
	ちぬからくる のちう	chinukara- kurunochiu	白	星の名	(註5)北斗七星?
	つぶ	Tup	春・厚	太陽	
	つ(ふ)かむい	Tupukamui	春・厚	太陽神・日 神	
	にさっさほつ	nisat-sahot	白・厚	暁の明星	(註5)参考:にさつ nisat(白・厚) 暁、夜明方の意
	のちい	nochi-i	春	星	例:pon-nochi-i 小星
	のちう	Nochiu	白・春	星	
	ぷいさ(ん)の ちう◆	Puisannochiu	春	星の名	
	ぼんのちう	Ponnochiu	白	小星	
	まっねっけう ◆	Matnetkeu	春	星の名	okanji(七星)の第三番目の星の 称
	もちのちう◆	Mochinochiu	春	六星と三星 との総称。	syn:matneukeu
	りこ(ふ)	Rikop	春	星	

	れぬしくる	re-nush-kuru	白	三星	(re-niu 三人・kuru 者・ren 三人・ush の・kur 者)
--	-------	--------------	---	----	---------------------------------------

<採集地域の略>

白:白糠郡白糠

春:釧路市春採

厚:厚岸群厚岸

<日高地域の天体に関する語彙・18点>

◆…末岡氏の著書及び、他の辞典に記述のないもの

日高	あるのま (ん)のち う◆	arunomannochiu	ペ・二	宵の明星・夕 星	
	あんけ ◆し	Ankesh	ス	あかつき	
	いるむ ぶ	irum-ph	ペ	星の名	(註6) エ(レ)ムプ(ネズミ・倉…オリ オン座の外周4つの星を倉に見立 てる)か? *田村すず子『アイヌ語 沙流方言辞典』
	かんど	Kando	二・ ス・幌	天・天界	
	さらはこ ろのちう ◆	saraha-koro- nochiu	荷	彗星	(註7) 人類学雑誌第 27 号(1911) 吉田巖氏「星に関するアイヌの伝 説」にサラハコロノチウ<日高・胆 振で尾を持つ星>、サラウシノチ ウ<日高・胆振で尾有る星>をの 記述あり。
	ち(ぶ)	Chip	ス	日(chup の方 言)	
	つから けつ(ん) ち◆	tukara ketunchi	長	星の名	(あざらしの干皮に凝したる称)と の記述あり
	つ(ぶ)か むい	Tupkamui	貫	月、月神	
	と	To	ス	日、昼	
	にさつほ っ	nisat sahot	二	暁、明星	
	のちう	Nochiu	ペ・ス	星	
	ぺっの か	pet-noka	ペ	天の川	
	ぼつら ◆	po-tura	二	児ども連れ、暁の明星が児童を連れて現れる (upash kuma)こと	
	まっこの ちい◆	mak-konochi-i	幌	流星	(註8) 人類学雑誌第 27 号(1911) 吉田巖氏「星に関するアイヌの伝 説」にマツコプニノチウ<マツコプ ニ…女のところへ往く意>とあるが その由来はわからないとしている (註8続き)→夜這い星との関連 は? 星が飛ぶのをマツコイワとも。

	まっこいわ	mat-koiwa	幌	星の飛ぶこと	
	む(ん)ぬ いえ(ぶ) ころのち い	munnuyep koro nochii	荷・二	彗星・箒星	(註9)人類学雑誌第27号(1911)吉田巖氏「星に関するアイヌの伝説」にムンムエツプノチウ<箒星>、ムンヌエツプコロノチウ<箒を持つ星>をの記述あり。
	む(ん)ぬ いえ(ぶ) のちう	munnuyep nochiu	二	六星	(註10)上記を見るに本当に六星か？
	れぬし ぺ◆	Renushipe	ぺ	三星	

<採集地域の略>

平:日高国沙流郡平取村 二:二風谷村 ぺ:荷負村字ペナコリ
 ス:荷負村字スケレベ 幌:幌去村 長:長知内村
 荷:荷負村 貫:貫気別村

『アイヌ語方言辞典』服部四郎編 岩波書店 1964年

アイヌ語の10の方言の基礎語彙や基本表現を収めた辞典である。編者は服部四郎。共編者は知里真志保、木村彰一、山本謙吾、三根谷徹、北村甫、田村すず子。収録語彙数は約2100語。収録地域は、北海道の八雲、幌別、沙流、帯広、美幌、旭川、名寄、宗谷の8方言と樺太のライチシカ方言、千島方言(こちらは独自の調査による採集ではなく鳥居龍蔵の『千島アイヌ』より引用)。語彙の選択基準は、日本語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語などの基礎語彙に関する研究に依拠している。そのために、アイヌに特有な文化に関する語彙の収録に問題がある。しかし、アイヌ語研究者・学習者には基礎的な文献とされている。当時のパンフレットには「アイヌ語は滅びようとしている本辞典は学界への貴重な贈物だ」とある。1990年以降、言語学界では、アイヌ語を含めた危機に瀕する言語の研究に力が入られるようになったが、この辞典はその先駆けをなすものとして現在において評価される。また、冒頭の序説では20ページ以上にわたり服部氏によるアイヌ語の調査に至った経緯と約2年に渡る調査地の記録、採集に協力した話者の記録もあり、その時点でアイヌ語に関する調査がすでに難しくなっていたことが記されている。中でも協力した話者に関しての記録は詳細であり、各地域の方言の特色や違いにも言及されている。記述されている地名を実際の地図に照らし合わせていくと、語彙の変化は10-20kmの距離ですでに表れており、意味や節(抑揚)が違うという記述がみられる。北部では樺太の影響もあってか内陸と違い聞いてもわからなかったという証言がある。(名寄方言の提供者、北風磯吉氏)各地域の方言の近似性や変化に関しての記述もあるため、精査していくことで地域の特色や方言の分類を行えることを示唆している。当辞典ではアイヌ語諸方言の科学的分類はないと言っていい、辞典の刊行から60年以上経つ現在、科学的分類を試みている研究論文も見られる。もはや言語学の域ではあるが、今後アイヌの星に関するデータベースを構築するうえで、必要であると考えられる。

当辞典内における天体を意味する語彙は「天文、自然現象」の69項目のうち13項目。

	太陽	日蝕
八雲	cúp;cúpkamúy; tókápcup;rikomátonpi(祈るとき)	(tókápcup)ráy;cúp sánpe wén;cúp kasí kúrkam
幌別	(tokáp-)cúp	cúp cirúki ;tokápcup ráy
沙流	(tókápcup-)cúp(-kamuy)	(tókápcup) 'arukí《…呑まれる》(だんだん消えていくこと);(tókápcup)ráy《死ぬ(皆既蝕)》
帯広	(sirpeket-)cup(-kamuy)	cúp(-kamuy) ráy
美幌	(sirpeket-)cup(-kamuy)	(sirpeket-)cup(-kamuy) ray
旭川	tókam cúp kamúy;cúp kamúy;cúp	tókam sírkunne;cúp 'ankóyki
名寄	cúp;tókamcup;tókamcupkamuy	tókam sírkunne
宗谷		cúp ráy
樺太	toonocuh;rikomah	cuh ciruki(狐・rohse・カラス・大ダコなどが太陽を喰う)
千島	shiripekuru chup(129);shiribekeri chiup(158)	未記入

	月	満月
八雲	kúnne cúp(kamúy);cúp;rikomátonpi(祈るときに言う)	cúp nóski;sikári cup
幌別	(kúnne-)cup	sikári cup
沙流	(kúnne-)cúp(-kamuy);rikómatonpi[雅]	sikáricup;cúp sikári《月がまるい》
帯広	(kúnne-)cúp(-kamuy)	Sikáricup
美幌	(kúnne-)cup(-kamuy)	cup sikannatki《月がまるい》
旭川	kúnne cúp kamuy	cúp nóski 'anna
名寄	kúnnecúp; kúnnecup kamuy	Sikáricup
宗谷	kúnne cup kamuy	cup sikári na《円くなった》;cup noske(-kehe)《15日》
樺太	(kúnne)cuh;cuhkamuy;rikomah(老)	sikaricuh;cuh sikari hemaka《満月になった》
千島	shirokoro chup(129);shirikuku chiup(暗き日 158)	未記入

	半月	三日月
八雲	cúp 'emko	'asítcup;'ánecup;péwrecup
幌別	未記入	péwre cup;'asítcup
沙流	言わない	péwre cup;'asítcup;níncup《25日ごろの月》
帯広	言わない ;cúp emko は《1か月の半分》	'asítcup

美幌	言わない	'asitcup;cup pon《月がだんだん小さくなる(月末に)》
旭川	cúp 'émko	未記入
名寄	未記入	póncup;níncup
宗谷	cup 'énko,-ho	わからない
樺太	'enkocuh	poncuh(出たばかりの)
千島	未記入	未記入

	新月	月蝕
八雲	'asitcup	kúnne cúp ráy
幌別	Níncup	cúp cirúki
沙流	'asitcup	(kúnne-)cúp 'arukí(だんだん消えていく);(kúnne-)cup ráy(皆既蝕)
帯広	níncup《みそかの月》	言わない
美幌	'asitcup	kunnecupkamuy ray
旭川	'asitcup	見たことがない
名寄	'asitcup;péwricup	kúnne sirkunne
宗谷	'asitcup	cúp ráy
樺太	'asiricuh	cuh ciruki
千島	未記入	未記入

	星	北極星
八雲	Nocíw	言わない
幌別	Nocíw	未記入
沙流	nocíw;nisátsawot《明けの明星》	言わない
帯広	Nocíw	知らない
美幌	Rikop	言わない
旭川	nocíw;nisátca'ot《明星》	未記入
名寄	Nocíw	Porónociw
宗谷	ketá;cinúkar ku《明星》	わからない
樺太	keta;noociw[老]	知らない
千島	ketta(129)	未記入

	北斗七星	天の川
八雲	wákkakup nocíw	Nisóunpet

幌別	未記入	Pétnoka
沙流	言わない;mosínrutuye(?)	Pétnoka
帯広	知らない	Pétnoka
美幌	reppa cinukarkur	Mosinnoka
旭川	'iwán pón nociw	niskototta pétnoka 'án.《空に天の川がある》
名寄	'iwánnociw(?)	Pétnoka
宗谷	'upópo ketá《七つ星》	知らない
樺太	知らない	未記入
千島	未記入	見たことがない(!) 註)原文ママ

	流星
八雲	nociw móm《星が流れる》
幌別	未記入
沙流	nociw túp《星が流れる》;nociw 'onísposo《星が落ちる》
帯広	知らない;nociw hácir(?)
美幌	rikop'uko'iwak《星が流れる》
旭川	nociw 'oyúpu(N)
名寄	'oyúpu nociw(?)
宗谷	忘れた;ketá passé wa《星が流れた》
樺太	ketamukas[老];keta cahsewa oman[児]《星が流れた》
千島	未記入

抜き出してみると、星に関する語彙の採集の少なさに驚かされる。なかでも北斗七星に比べて北極星に関する語彙は、未記入以外に「知らない」「言わない」という回答も見られる。本州では方角を知る星としてそのわずかな動きすら注目される北極星だが、アイヌの星の伝承の中では呼び名や伝承が豊富な北斗七星に比べると、関心度が低かったのだろうか。北海道の緯度の高さも関係すると思われるが、この事例だけで論じることはできないのでさらなる検証が必要である。

2023年7月14、16、21、22日・祇園祭(前祭および後祭)わらべうた聞き取り

筆者が「ろうそくもらい」の風習を初めて知ったのは今から20年以上前のことである。和歌山県の公開天文台に勤務していた際に利用者から「北海道では七夕にろうそくをもらって歩く風習があるが、由来はハロウィンなのか？」と質問を受けたのが始まりだった。七夕にまつわる風習や史跡、とりわけ出身地である大阪府枚方市・交野市の七夕史跡を専門に調査していたことから質問を受けたのだが、当初は該当する風習に関してはまったく知らず、北海道の施設関係者へ問い合わせで詳細を知った次第であった。

北海道の七夕行事は日程自体も地域差があり函館と一部の道南では7月7日、それ以外の地域では月遅れの8月7日の夜に子どもたちが連れ立って家々をまわり独特なはやし歌を歌いながらろうそくをもらって歩く。昨今ではお菓子をもらって歩くことから、同じく子どもたちがお菓子をもらって歩く季節行事の「ハロウィン」を連想されることは想像に難くない。勤務先の施設のHP上でろうそくもらいについての解説ページをオープンさせたところ、多くの協力者にはやし歌の歌詞やご自身の経験した思い出を寄せていただき、思ったよりも複雑な風習であることを実感した。北海道は他地域と違い、入植者由来の風習や文化が少なくない。それぞれの故郷の文化を持ち寄っているため数キロどころか道一本を挟んだだけで風習が変わることもある。幕末から明治期のろうそくもらいの様子を見ると、紙で作った提灯様のものを持って練り歩く子どもたちの様子は、東北のねぶた祭りを連想させる。ねぶたの風習自体も他地域の祭りとの類似があり、秋田県秋田市の竿灯まつり、富山県魚津市のたてもん祭り、石川県能登半島の各地でおこなわれる能登キリコ祭りといった祭礼を辿っていけば、その源流は京都の祇園祭だとし、実際これらの風習が北前船を介して北へと伝播したとする説もある。その証左のひとつとしてあげられるのが祇園祭の各山鉾にて期間中授与される”ちまき”（食用ではなく玄関先などに掲げる笹の葉でできた厄除けの縁起物）やお守りを子どもたちがすすめる「ちまき売り」のわらべ歌だ。参拝者に山鉾への献灯を呼びかける「ろうそく一丁献じられましょ」という歌詞が、ろうそくもらいの「ろうそく一本頂戴な」と類似する。京都の大学で仏教学を専攻していたこともあり、京都市内の神社仏閣と祭礼には学生時代から親しんでいたが、祇園祭と「七夕ろうそくもらい」を繋げる可能性に強く興味を持ったものの、公開天文台での勤務上、夏季は繁忙期で身動きが取れず、加えて物理的な距離もあり実地調査をする機会を得ることが出来なかったが、転職に伴い京都へ移住。その後退職し調査を本格的に開始しようとした矢先にCOVID-19の世界的な流行が始まった。これにより、いわゆる”コロナ禍“で祇園祭も中止・神事のみ実施といった縮小を余儀なくされた。部分的に祭礼が復活した2022年も、子どもたちの参加はほとんどの山鉾で見送られた。2023年は3年ぶりに前祭・後祭すべての祭礼を執り行うことが出来、10万人を越える人出でにぎわったのも記憶に新しい。前祭では蟪螂山・占出山、後祭では鯉山・大船鉾・北観音山・八幡山（録音媒体）で歌われているのを確認。山鉾によっては現在献灯がなく、ろうそくの歌詞がないものもある。いずれの山鉾もわらべ歌を歌う子どもたちの撮影は禁止のため、すべてその場で歌を聞き取り採録とした。

7/16(前祭宵山)

◇蟪螂山(19時頃訪問・献灯なし)

蟪螂山の前で未就学～小学校低学年の男女数人が歌を披露。歌詞を覚えてない子のために保護者が目の前で大きく歌詞を書いた紙を張り付けたボール紙を持っていたのが微笑ましい。

「蟪螂山のおみくじはこれより出ます/常は出ません今晚かぎり/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましょ/からからからくり/からくりおみくじかまきりお御籤どうぞえ/お御籤どうぞえ/ちまきどうぞえ/手ぬぐいどうぞえ/Tシャツどうぞえ/パンフレットどうぞえ」

蟻螂山自体は前祭期間中、蟻螂からくりの御神籤をひく場所にて終始、録音媒体でわらべ歌を流している。蟻螂山の特色である蟻螂のからくりを使用した御神籤が歌詞の中に入る。

「蟻螂山のおみくじはこれより出ます/常は出ません今晚かぎり/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましよう/からからからくり/からくりおみくじかまきりお御籤どうぞえ/お御籤どうぞえ/ちまきどうぞえ/手ぬぐいどうぞえ/Tシャツどうぞえ/飾り扇子どうぞえ」

7/21(後祭宵々山)

◇八幡山(19時頃訪問・献灯あり)

小学校高学年～中学生の男女がいたが、はやし歌は録音されたものが定期的に流され、時折肉声での歌が披露された。

「八幡^{はちまん}さんの厄除けの御守りはこれより出ます/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましよう/ろうそく一丁献じられましよう/ろうそく一本どうですか/ちまきどうですか/おまもりどうですか/鳩笛どうですか」



7/22(後祭宵々山)

◇鯉山(18時30分～19時頃訪問し採集・献灯あり)

年齢別で約20分ごとに順次交代。「鯉さん当番」と呼ぶ)18時までの時間帯は未就学児の姿も見かけられた。

「鯉山の御守りはこれより出ます/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましよう/ろうそく一丁献じられましよう/ろうそく一本どうですか/ろうそく一本どうですか」

鯉山の献灯台(献灯を呼びかける他の山鉾も同様の献灯台がある)

◇南観音山(19時20分頃・献灯あり) 5名の少女(小学校低学年～高学年)

「厄除けの御守りはこれより出ます/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましよう/ろうそく一丁献じられましよう/ろうそく一丁どうですか」

◇大船鉾(20時頃・献灯なし) 6-7名の少女(小学校低学年～高学年と中学生)

「常は出ません^{こんみやうぼん}今明晩(宵々山のため。宵山には「今晚限り」という歌詞に変わる)かぎり/安産のお腹帯^{おふくたい}はこれより出ます/ご信心の御方様はうけてお帰りなされましよう/厄除けのちまきどうどうですか/大船鉾のちまきどうですか /お守りどうですか」

また、ネット上では youtube にて過去のわらべ歌を撮影したのもも閲覧可能となっている。

◆占出山(2009年宵山・小学校低学年男女 12 名) *ネット上での動画では最も古い事例の1つ

「安産の御守りはこれより出ます/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましよう/ろうそく一丁献じられましよう/ちまきどうですか/絵馬どうですか/安産の御守りどうですか(授与物に関してめいめいに呼びかけている)」

<https://www.youtube.com/watch?v=pwLsbQYA9p0>

◆南観音山(2010年7月20日宵山/10人前後/小学校低～高学年女児)

「厄除けの御守りはこれより出ます/明日は出ません今晚限り/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましよう/ろうそく一丁献じられましよう/ろうそく一丁どうですか」

<https://www.youtube.com/watch?v=W5BvUUBDvSc>

◆太子山(2011年・日程不明、小学校低学年男女)

「聖徳太子知恵の御守りはこれより出ます/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましよう/ろうそく一丁献じられましよう」

◆役行者山(2011年、歌詞から宵山。祭が前後祭に分かれたのは2014年からの為、動画が撮影されたのは7月16日と推測される)

「厄除け安産の御守りはこれより出ます/常は出ません今晚限り/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましよう」

https://www.youtube.com/watch?v=js3oG_z42ko

◆油天神山(2012年7月16日/7人未就学～小学生低学年男児)

「ちまきどうですか/御守りどうですか/手拭いどうですか/ミニ鉾どうですか/扇子どうですか/どうですかー」 *他の山鉾のような歌詞がなく授与品をすすめるのみ。前後年の状況が不明なため、来年以降聞き取り調査が必要な対象。

<https://www.youtube.com/watch?v=DuSvNbErZh0>

◆太子山(2012年宵山/16名小学校低～高学年男女)

「常は出ません/今晚限り/聖徳太子知恵の御守りはこれより出ます/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましよう/常は出ません今晚限り/ろうそく一丁献じられましよう」

<https://www.youtube.com/watch?v=bauw5Md1fHA>

◆木賊山(2012年7月16日宵山/10人前後/小学校低～高学年男女)

「木賊山/迷子の御守りはこれより出ません今晚限り/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましよう/ろうそく一本献じられましよう/粽どうですか/御守りどうですか/手ぬぐいどうですか/どうですか」

https://www.youtube.com/watch?v=BUAUd_AG5iw

◆南観音山(2016年7月24日・宵山 (9名 小学校低～高学年女児))

「厄除けの御守りはこれより出ます/明日は出ません今晚限り/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましょう/ろうそく一丁献じられましょう/ろうそく一丁どうですか」

<https://www.youtube.com/watch?v=UuJ07xTNMYs>

◆鷹山(2016年7月23日後祭宵山/音声のみ)

「厄除けご長寿の御守りはこれより出ます/明日は出ません今晚かぎり/ご信心の御方様は受けお帰りなされましょう/いぬの御神籤どうですか/ちまきどうですか」

<https://www.facebook.com/watch/?v=1024994664254821>

◆鈴鹿山(2019年7月27日宵々山/8人/小学高学年女兒)

「厄除け安産の御守りはこれより出ます/常は出ません今明晩かぎり/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましょう/ちまきどうですか/てぬぐいどうですか/パンフレットどうですか」

<https://www.youtube.com/watch?v=h-L1e52jQG8>

◆役行者山(2019年7月23日宵山/4名の内歌っているのは2名/小学校高学年女兒)

「厄除け安産の御守りはこれより出ます/常は出ません今晚限り/ご信心の御方様は受けてお帰りなされましょう /団扇どうですか/『月間京都』どうですか/祭札どうですか/ストラップどうですか/ミニ提灯どうですか/『祇園祭のひみつ』どうですか/Tシャツどうですか/手ぬぐいどうですか/御集印帖どうですか/風呂敷どうですか/ハンカチどうですか/御守りどうですか」

<https://www.youtube.com/watch?v=98hK5fh-6GU>

各山鉾のわらべ歌については、京都市図書館のレファレンスサービスにも照会があり、以下で回答を閲覧することが可能である。(レファレンス共同データベース 登録 2016/10/29

URL https://crd.ndl.go.jp/reference/entry/index.php?page=ref_view&id=1000198906)

前述の採集の通り、わらべ歌は祇園祭の宵山期間(現在は前祭 7/14-16・後祭 7/21-23)厄除け粽をはじめとした授与品を売る子どもたちが歌うものである。基本のメロディと歌詞があるが、各山鉾の由来ごとに授与する者が変わるため若干の違いがうまれる。また授与の最終日となる宵山は歌詞に「常は出ません今晚かぎり」が追加、宵山前日のいわゆる宵々山には「今明晩かぎり」と歌う山鉾もあり、七夕ろうそくもらいを連想させる「ろうそく一丁(一本)献じられましょう」の歌詞は、今も献灯のある山鉾に限られる。各山鉾は全部で34あり、すべての山鉾で今も歌われるかは不明である。少子化の影響もあり山鉾町自体に子どものいる世帯が少なくなりつつあることもあり、今後どこまでこの風習が続くかも不透明と言わざるを得ない。

過去のわらべ歌と比較すると、同じ山鉾でも歌詞が若干変化がみられることと歌う子どもたちの人数が年々少なくなっていることがわかる。2010年代は10名以上で歌われている山鉾が多く見受けられるが、2023年に調査可能だった会所は5名前後が多い。鯉山のように毎年町内の子どもたちに歌を習わせ、時間制で交代しながら歌を歌い風習をなるべく変えることなく残す取り組みを行う

町もあるが、少子化だけを理由にできない祭りへの取り組みの変化も否定はできない。わらべ歌に関しての各山鉾への一斉調査は過去に前例がない。京都市教育委員会や保存会など祇園祭を執り行う上部団体への協力を取り付けて、現況を取りまとめる必要を強く感じる。

8月7日・札幌市中央区啓明地区での「七夕ろうそくもらい」実地調査

北海道における文化の伝播で、重要な位置を占めるのが北前船の存在である。日本海沿岸を中心に盛んだった交易は、物資の交易だけでなく文化の交流にも重要な役割をはたした。その中で天文民俗分野として注目したいのが前述にもある北海道を中心に残る「七夕ろうそくもらい」の風習である。隣近所の子どもたちが集まり、夕方から提灯や空缶でつくったカンテラを片手に歌を歌いながら家々をまわりろうそくをもらって歩く。地域や出身(入植前のもの)を越えて道内に分布する風習であり、現在も札幌や小樽、函館などの市街地では七夕行事のひとつとして続けられている。近年、TVなどのマスメディアやSNSで取り上げられることもあり、道外での知名度はあがってきているものの、小樽など大都市での状況をまとめているものはあるが(佐々木優香「北海道の七夕行事「ローソクもらい」の囃子歌に見られる伝承過程について—小樽の事例をもとに—」小樽市総合博物館紀要第35号 2022.3.20)広い北海道全土を網羅しての調査は難しいのが現状である。はやし歌の歌詞に関しても地域差が見られ、伝播することによって歌詞に変化が見受けられ、地域の特色が織り込まれたものなどが指摘できるものの、その成立や伝承の過程についてはようやく明らかになりつつある。青森県のねぶた(眠り流し)との関連は以前より指摘されているほか、北尾浩一氏の先行調査によって新潟県佐渡島でのろうそくもらいの記録が採取されている。北前船による文化の伝播をさかのぼり、京都・祇園祭の山鉾町での囃子歌との類似を調査する試みを続けているが、ながらくcovid-19の流行により祭自体の自粛も続いたため進展が難しい状況が続いていた。2023年5月にcovid-19が5類感染症移行となり感染症対策が緩和されたことに伴い、中止や自粛が続いていた祭礼や一般イベントが復活となり、七夕ろうそくもらいの風習も3年ぶりに復活、函館や札幌など、風習が根強く残る地域で、こどもたちの歌うはやしうたが久しぶりににぎやかに響くこととなった。2023年の七夕行事復活情報に関しては、共に調査活動をおこなう今野利秋氏による照会の結果、札幌市中央区の南円山まちづくりセンター(南円山会館)のご協力にて、啓明地区の子ども会がろうそくもらいを行うとの返答を頂いた。当日は今野氏と共に伺い直接、保護者の方に了承をとり、行事に同行させていただき許可を得ることができた。15時までに子ども会の子どもたちとその付き添いの保護者計15名が集合。子どもたちの年齢は未就学児から小学校高学年までおり、その服装はまちまちで浴衣姿の女兒もいたが、共通して大きなカバンやリュックを用意し、引率の保護者から渡された厚紙を使った提灯飾りを手に持つスタイルが印象的だった。提灯飾りは紙で作られたものでかつては夜に行われ実際に灯りをともした提灯やカンテラを持った名残である。防犯上保護者が引率し、時間帯も夜間から昼間に行う地域が多くなった今、昔の風習をそのままに続けることは難しいが、当時のスタイルを残しつつ柔軟に対応し実施していこうとする保護者の苦勞が感じられる。今回同行を許可いただいた啓明地区はかつてはろうそくもらいの行事をおこなっていたが、一旦途絶。数年前から復活したが、そのきっかけとなったのは、旭川市周辺出身の保

護者の方が子ども会の役員を担当したことだという。その方自身はろうそくもらいを行わない地域の出身だったが、従姉妹が旭川市におり夏休みに遊びに行った際、参加したろうそくもらいの楽しい記憶があり、自身の子どもたちにも体験させたいという願いから復活にこぎつけたとのこと。子ども会にはその方を中心に旭川出身の方が数人おられ、はやし歌は行事を復活させた保護者たちが幼少時に旭川市で歌ったものが使われていた。

「ろうそくだーせーだーせよー、だーさないとかっちやくぞ、おーまーけーにくいつくぞ」

であり、札幌市内の地域で一般的に歌われる

「ろうそくだーせーだーせよー、だーさないとひっかくぞ、おーまーけーにかっちやくぞ」

(札幌市清田区・東区など)とは異なる。啓明地区出身の保護者の方(40代男性)は、昔行事があった際に歌った歌詞は今の歌詞と違っていたとのことだったが、どんな歌詞だったかまでは聞き取ることができなかった。道内での人の移動によって、同じ「ろうそくもらい」という風習でも他地域の事例が持ち込まれ根付くという一例を眼にすることとなった。少子化や都市化に加えてコロナ禍もありこの数十年で変容せざるを得なかったろうそくもらいは、今後もさらに様々な要因で変容していくだろう。調査の重要性を改めて感じると同時に、調査することの難しさも痛感する。その後4軒の個人宅と2棟のマンションをまわり、行事は終了。持参していたカバンにお菓子をたくさん詰め込んだ子どもたちが保護者と共に帰宅していくのを見届けて調査は終了となった。はやし歌に関しては、地域での違いは認識していたものの、今回は札幌市外の出身者が行事を復活させたことで他地域の歌詞が使われるという事例を知らずも目にすることとなった。このまま行事が続いていくことでこの地域のみ、微妙に違う歌詞が続けられるとすれば、やがてこの地域のろうそくもらいの歌として定着するのかもしれない。他の地域でも同様の事例がある可能性は否めない。また、風習自体も少子化に伴い今後も存続する保証はない。ろうそくもらいを実施する日は函館以外のほぼ全域で8月7日と特定されるため、個人が1度に調査・記録できる地域も限られる。効率よく各地域の状況を調査・記録できる手段として、地域の公民館や図書館といった社会教育施設や科学館施設に協力を仰いだり、独自に興味を持って調査を行い、ネット上で紹介をしているサイトやブロガーと連携して事例を少しでも多く集めて残していく必要を感じた。



<南円山まちづくりセンター前ではやし歌をうたう子どもたちと見守る保護者>

歌い終わった後、菓子袋を受け取り訪問先の方と記念撮影をするのが一連のパターンとなっていた。夏休み中のため子どもは参加しやすいが平日の場合引率の保護者の確保が難しくなることも。

<訪問したマンションに飾られた七夕飾り>

>

毎年七夕飾りと、ろうそくもらいで訪れる子どもたちのために工夫をこらしたプレゼントを用意しているとのこと(この日はビニールプールに水風船を浮かべ、縁日の「ヨーヨー釣り」のように仕立てて子どもたちにふるまっていた。子どもたちにろうそくもらいを楽しみ良い思い出としてほしい大人側の願いが感じられる。七夕飾りは柳の木が使われ、毎年使えるように鉢植えて準備しているとのこと、高さ2mほどあり、七夕にまつわる飾り物やマンション住民が願いを書きこんだ短冊が飾られていた。



<子ども会の子どもたちが持っていた提灯飾り>

画用紙と不織紙を組み合わせた保護者のお手製。同行していたご年配の方によれば、かつてはこういった仕様で中に空缶(250mlの細いジュース用等使われていたとのこと)を入れて実際にろうそくを灯す仕様もあったという。大き目の空き缶をそのまま使ったカンテラなども見られたが安全上の問題から懐中電灯に、そしてさらに行事自体が夜間から昼間へと移行したことで、本来の目的ではなくなったものの、風習のアイコンとして今も提灯飾りは欠かせないという。同行の我々にもひとつずつ渡してくださった。

8月7日・野外博物館「北海道開拓の村(北海道札幌市厚別区厚別町小野幌 50-1)」訪問調査

啓明地区を訪問する前には今野氏と共に札幌市厚別区厚別町の野外博物館・北海道開拓の村を訪問。期間限定展示「北海道の七夕」を見学。行われていた期間展示とイベントは下記の通り。

・岩間家年中行事「岩間家の七夕」

宮城県亘理からの移住者の年中行事として行っていた七夕のしつらえを紹介。

・季節展示「七夕飾り」

村内の建造物前や庭に柳に飾りつけをした七夕飾りを展示

・年中行事紹介「北海道の七夕」

七夕の北海道での風習、歴史などを紹介、ろうそくもらいの風習体験イベント

・年中行事「北海道の七夕・短冊飾り」

敷地内ではイベントの対応中だった学芸員の N 氏にお話を伺うことができた。当施設は明治から昭和初期にかけて道内で建築された約 50 棟の農家やホテル、学校、個人宅、店といった建造物を移築し当時の様子を再現した野外博物館である。開拓の村自体で北海道の七夕に関する調査を行ったことはないが、毎年七夕飾りの展示ややろうそくもらいを実際に体験してもらうイベントを行っているとのこと。参加申込みをした家族連れを対象にろうそくもらいの歴史についての説明と、函館バージョンと札幌バージョンの歌をレクチャー、実際に建物をまわって歌を歌いお菓子をもらう体験をしている。参加者は主に市内からの参加だったが、函館・札幌以外の出身で違うバージョンを歌った記憶を話す方もいたとのこと。イベント実施中の建物には玄関先に七夕飾りを設置している箇所もあり、北海道独自の柳の木を笹竹代わりにした七夕飾りを見ることができた。北海道は植生的に本州のような笹竹はなく、類似する柳(エゾヤナギ)を笹竹の代わりに使用する。この後実際に調査した厚別区でのろうそくもらいでも、最後に子どもたちが訪問したマンションでは玄関先にエゾヤナギをつかった大きな七夕飾りがしつらえてあり、住宅街では最近飾りを外に飾る家庭もなく、笹飾り自体もしつらえることは少なくなったと大人の方たちが話されていたのが印象的だった。



画像①



画像②

(画像①)柳をつかった七夕飾り。北海道に本来竹は自生しておらず、現在道南の一部で自生しているものは明治に入って植栽されたもの。そのため七夕飾りは柳の木を使用することが一般的となっている。ただし本州で見られるしだれ柳ではなく北海道固有種のエゾヤナギである。

(画像②)短冊飾りをつくるイベント会場となっていた「旧武井商店酒造部」入り口の七夕飾り。建物自体は 1886(明治 19)年頃のもの。園内にはその他数か所七夕飾りをたてた建物があり、ろうそくもらいイベントのときは訪問する建物の目印にしたとのこと。旧仙台藩亘理伊達家の移民団として明治 4 年に伊達市へ入植した畑作農家の家屋を移転した「旧岩間家農家住宅」(画像③)だけは仙台所縁ということからか、通常の竹笹を使用した七夕飾りが見受けられた(画像④)。もとは北海道伊達市内にあったという建物で 1882(明治 15)年に郷里の大工によって建築されたため、北海道の風土にあわせながらも間取りや建築様式は亘理の様式が受け継がれているとのこと。ここで解説を

されていたボランティアの男性(60代・岩見沢出身)にここだけ他と違って本州と同じ笹竹の飾りであることを聞いてみたところ、仙台からの入植者ということから文化の違いとして本州と同じ笹竹の七夕飾りをしつらえているという回答があった。ご本人も中学生くらいまでろうそくもらいを行っていた記憶があるとのこと。当時は集落の外との交流は少なく、特に子どもたちの場合は集落内だけで完結した生活を送っていたこともあり、集落のほぼ全世帯が知己であることからカンテラ片手に子どもたちだけで普通に夜道を歩きまわっていたことをお話して頂いた。この会話の際に、筆者が京都から北海道の七夕を見るために今回来たことを話すと、学芸員の



方に連絡
ができた。



道
の七夕を見るために今回来たことを話すと、学芸員の
を付けて
いただくこと

画像③

画像④

北前船の可能性 小樽市総合博物館特別展「アトウイ-海と奏でるアイヌ文化-」

2023年1月23日に小樽市の総合博物館を訪問、特別展「アトウイ-海と奏でるアイヌ文化-」を見学し副館長のO氏より説明を伺った。海を仲立ちにした大陸や本州とアイヌの交流は古く、なかでも北陸地域とアイヌのモノやヒトの文化の交流に近年注目が集まっていると伺った。展示内に登場した北陸の主な地域だけでも

- ・新潟(吉田鴻巣、石地、能生、糸魚川)
- ・富山(射水、院林)
- ・石川(輪島、射水、安部屋。羽咋、美川、橋立、瀬越)
- ・福井(河野)

が挙げられており、和名のノボシ(ぎょしゃ座α星カペラの和名)のように星の文化が交易や入植者と共に北海道へ流入した可能性や、ろうそくもらいの伝播ルートとしての可能性を論じた。また、O氏からは小樽市高島地区につたわるろうそくもらい

の話をお伺いした。小樽市の西北部、石狩湾に面する海岸沿いの丘陵地にある集落であり、かつては高島郡高島村と呼ばれ維新前からニシン漁の盛んな場所であったという。1869(明治2)年に13



戸44人が移住してきたのを皮切りに移植者が増えていく。その出身は越中・越後・佐渡・庄内・出羽・津軽と北陸東北地方が占めた。地域の七夕行事には「やま」と呼ばれる青森・津軽のねぶたと同じものを作り、町内を練り歩く。子どもたちは文字を書いた提灯や灯籠を持って「やま」と共に歩いたという。この「やま」に使うためのろうそくを子どもたちが集めていたのが「ろうそくもらい」のはじまりだったとのこと。かつては高島地区だけでなく小樽市内へも「やま」がまわったというが、ろうそくをもらって子どもたちが街中を歩くのが「物を乞う」ようで好ましくないと、風習は高島地区から外へ出ることがなくなった。少子高齢化がすすみ1998(平成10)年頃に一度はいったん途絶えた七夕まつりの灯は2003(平成15)年、地元の小学校120周年にあわせて大人たちが「やま」をつくり校区内を歩いたことをきっかけに復活、翌年からは「高島七夕パレード」として昔ながらの提灯やアニメキャラクターを模した提灯を作り歩く行事も行われたが残念ながら現在はおこなわれていない模様。小樽は明治期に北のウォール街と呼ばれ明治初期から港湾都市として栄えてきた。当時の文化や習俗に関しては明治末から昭和初期にかけて教育者・稲垣益穂が約40年にわたって綴った全55冊の『稲垣益穂日誌』があり、その中にも当時の七夕に関する習俗が記されている。小樽地域の七夕習俗に関しては小樽市総合博物館の紀要にも記事があるが、継続した調査はされていないとのこと。(樽市総合博物館紀要・巻35号『北海道の七夕行事「ろうそくもらい」の囃子歌に見られる伝承過程について :小樽の事例をもとに』2022年)

今後の研究調査への発展と課題

人が星の存在を認知するとき、長年の経験をもって規則性を見つけることで星を見ることを生活に取り入れ、やがてその星に独自の名前が付けられ後の世代へと伝えられていく。地理的な条件と歴史的な条件というふたつの条件を元に、日本の星の名前(和名)は上記のプロセスを経て、各地で生まれ伝承されてきた。野尻抱影氏の「日本の星」(研究社・1936)や内田武志氏の「日本星座方言資料」(日本常民文化研究所・1949)といった先行者の調査結果にあわせて、平成となつてからも北尾浩一氏の「星と生きる-天文民俗学の試み-」(ウインかもがわ・2001)「星の語り部-天文民俗学の課題-」(ウインかもがわ・2002)「天文民俗学序説」(学術出版会・2006)をはじめとした調査結果が出ており、令和となつた今も調査によって新たな和名の採集は続けられている。その土地の自然環境や生活の違い、宗教、文化など認知の形成に影響する因子は様々だが、なかでも北海道は国内の中でも特異な生活文化を残す地域である。多くの道民は道外のどこかの地域から新天地を求めて移植してきた人々であり、故郷で既に伝統文化の中で暮らしてきたその基盤を持って移住してきており、地域ごとに入植前の土地の風習や記憶を受け継いでいる。上記にあわせて青森などの東北からもたらされたもの、北前船による日本海ルートの港地、その出発点ともいえる京都や関西からの文化伝承が複雑に絡み合っていることは想像に難くない。先達の調査研究によって多くの成果が挙げられているが、その後の北尾氏の調査によって新たな和名が見つかっていることから、まだ未発見の和名や風習が残る可能性が残る地域と言える。「七夕ろうそくもらい」に関しては明治期の入植者の流れとあわせた伝播の歴史だけでなく現在残る地域ごとの状況を記録するという必要にも迫られている。地域の風習が過去のものとなる前に急がれる課題のひとつだ。北

海道の七夕ろうそくもらいをはじめとして、全国各地の七夕民俗調査を精力的におこなっている今野氏と連携して少しでも多くの事例を記録することに努めたい。

アイヌの星の伝承に関しては、現地でのアイヌにルーツを持つ方々の協力を得ての実調査には至っていないが、末岡氏の著書と参考資料を主軸として、現存する文献を中心にした調査研究を来年度以降も進めていきたい。2022年がアイヌ神謡集の著者である知里幸恵の没後 100 年にあたり注目されたこと、北海道を舞台に北海道アイヌや樺太アイヌの登場する漫画作品がヒットしたことから2024年1月には実写映画が公開された。その中ではアイヌ民族の文化や暮らしが丁寧に再現、描写されたこともあり、アイヌ民族とその文化への一般の関心は現在非常に高い。アイヌ文化に関する一般向けの書籍も出版されるようになってきている。民族問題というセンシティブな要素を抱えながらも、調査に関しては追い風ともいえるだろう。未採集の伝承採集に関する可能性も、北尾氏がアイヌコタンのある二風谷にて末岡氏の調査資料にはなかった伝承の採集をしていることから低くはないと考える。末岡氏の遺族を通じて未発表資料があることも明らかになっているが、昨年春までは coved-19 の流行により対面での調査や聞き取りは依然として難しい現状があった。今、その制限は解かれたものの性急にことを運ばず、慎重かつ確実に調査を進めるための準備が必要な段階に入ったと言えるだろう。アイヌの星に関する伝承を身近なものとし、現在この研究基盤を通じて繋がりのある北海道の各大学や博物館施設の協力を得て、末岡氏の未発表資料の精査や氏の調査が及ばなかった地域での調査を行うことが今こそ求められている。星を認知し文化が伝承されていく過程を調査研究していく上でも北海道は今後、精力的に調査研究を続けていくべき場所であると考える。